



episode 43 深い悲しみの心に灯りをともした絵本

投稿者 かとう めぐみ さま(神奈川県)

夫が業務中の事故で亡くなった。
いつものように家族3人で納豆ごはんを食べ、送り出した後の出来事だった。

身体の中の臓器を一部失くした想いを抱えながら、2歳の娘と共に必死で毎日を送った。
なんとかなんとか生き抜き、百日忌を迎えた。

葬儀や遺骨、お金の事で揉めたことも忘れ、その日は皆で大切な人を喪った悲しみをわかち合えると思っていた。
けれど、法要を待つ間、控え室で語られたのは、見栄とお金の話だけだった。

法要を終え、夫の親族を見送った後、立ち上がる事が出来なくなった私は、
お寺の方のご厚意で休ませてもらえる事となった。
たくさんの絵本が並んでいる部屋で、娘に絵本を読んであげる気力もないまま、
目に止まった一冊の本を手にとった。
疲れた心でも、酒井駒子さんの白と黒で描かれた絵だけは、受け入れる事が出来た。
そのまま何も考えずに、ページをめくっていった。

「ある朝、くまは ないていました。なかよしのことりが、しんでしまったのです。」

ページをめくっていく毎に、くまの深い深い悲しみが私の胸に染み込んできた。
くまと共にことりと過ごした日々を思い返すことで、私の心に灯りがともってきた。
ようやく気力を取り戻した私は、母に電話をかけ、お迎えに来てもらうようお願いした。
そして、娘が眺めていた絵本を読み聞かせ始めた。

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2023」投稿作品より



『くまとやまねこ』
湯本香樹実 文
酒井駒子 絵
河出書房新社 2008年



本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。
さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本のある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



絵本でグリーフケア

2008年に刊行された『くまとやまねこ』は、グリーフケアの絵本として20年近くも、子どもから大人まで広く読み継がれています。

多数の文学賞受賞歴をもつ作家・湯本香樹実氏と、世界的に高く評価されている酒井駒子氏の初コラボ絵本は、芸術作品そのものです。

物語は、「なかよしのことりが、しんでしまった」シーンにはじまります。本作の内容を知らずに、表紙絵のかわいらしさに気を奪われて読み始めた読者は、強烈な衝撃を受けることでしょう。

死のシーンから唐突にはじまる『くまとやまねこ』ですが、お話のなかでも小鳥との唐突の別れをくまが受け入れきれず、ひとり暗闇に閉じこもってしまいます。その深い悲しみに寄り添い、再生するグリーフケアがテーマというわけです。



大事なものは時間、そして寄り添いです

大切な人との死別によるショックを受けてから立ち直るまで、「死の受容の5段階モデル」を提唱したのは、精神科医のエリザベス・キューブラー・ロス博士です。その5段階とは、①否認 ②怒り ③取引 ④抑うつ ⑤受容のプロセスになります。

この過程を湯本香樹実氏は、絵本という限られたページと、熟考された最小限のことばで、見事なまでに表現したのです。しかし、作者は「死をテーマにしようと思って書き始めたわけではない」と述べています。「何か大切なものを失ったところから、再び新たな何かが始まるまで、その中で流れている『時』というものを書きたかった」と。さらには、「死ばかりではなく、逢えなくなるとか、自分にとって大事な何かを失うというのは、それがたとえ人でなくても、その人自身にとっては『小さな死』といえるのではないのでしょうか」と説き、そして「その小さな死が起きたとき、時間というもののなかで再生していく。(中略) 失ったもの、

失ってからの時間、そういったすべてが手を取りあったうえでの再生なんだと思います」と語っています。



米エッツに影響を受けた日本人作家

『くまとやまねこ』が死生学の文学性を高からしめているのは、酒井駒子氏が描くモノクロ画にあります。ヴォルター・ベンヤミンが論じたように、「白黒の絵は、記述を無理強いするような力を秘めていて、子どもの心のなかに言葉呼び覚ます」ため、動物たちに昏さや憂いを帯びさせ、それがメッセージとなっているのです。全体はモノクロなのですが、悲しみの淵から再生へと向かいはじめたとき灯る淡いピンクに、読者の心にも光が灯るのです。

酒井氏が影響を受けたのは、アメリカのマリー・ホール・エッツ氏と言います。大人になってからエッツ氏の原画展をみて、黒を多用しても絵本として成り立つと改めて認識したのでした。酒井氏も黒が好きで、個展でとりあえず黒を多用した絵を出すと、それがすごく受け入れられたので、現在のスタイルに定着したのです。

もうひとつ特徴的なのは、ボール紙に画を描くスタイルです。ボール紙が黒色とよく合うことに気付いた酒井氏が、ボール紙ではじめてつくった絵本が『くまとやまねこ』なのです。

小説家の湯本氏が絵本を作る醍醐味を、絵と文と両者が適度に押したり引いたりする作業だと述べています。文章が先にあっても、絵ができたとき、文章と重なっているところは文を削ったり、書き直したりしているのです。そこで生まれたのが、文字だけの画面と、文字のない絵だけの画面です。48ページすべてにおいて、作家と画家とが緻密に計算し尽くした極上の芸術なのです。

文献

- 1) E・キューブラー・ロス著：死ぬ瞬間－死とその過程について、中央公論社、東京、pp.261-293、1969.
- 2) 著者インタビュー・湯本香樹実さん：絵本『くまとやまねこ』、楽天ブックス、https://books.rakuten.co.jp/event/book/interview/yumoto_k/ 2008/4/24